

K・PERSON (65) …… 沢田 研一

沢田研一



◎文・斉藤 大起／写真・吉田 太一
レタリング：延山 博保／NDOCソラフィックス

さわだ・けんじ
歌手、俳優。1948年鳥取生まれ、京都で育つ。横浜市在住。
ザ・タイガースのリードボーカルとして67年に「僕のマリー」でデビュー。
71年からのソロ活動でも「勝手にしやがれ」「時の過ぎゆくままに」
「TOKIO」などヒット曲多数。
5月に新アルバム「ROCK'N ROLL MARCH」を発売。東京ドーム公演
は12月3日午後3時開演。問い合わせはディスクガレージ☎0180(99)3111。

還暦迎えて 初ドーム 今もロック

約八十曲、休憩込みで六時間半。
ザ・タイガース時代から現在までの
楽曲を集め、今冬、東京と大阪で初
のドーム公演に臨む。タイトルは入
間60年・ジュリー祭り。そう、ジ
ュリーが還暦を迎えたのだ。

「六十までやれば偉いと言われる、
と思いつながらやってきた」と笑いつ
つも「ずっと歌い続けていこうと」



「ここまで来ていた、ということなん
ですよね」と淡淡としている。いわ
く「あくせくしていない」。

デビュー当初、メンバーが日本一
を掲げ熱くなっていた傍らで「そん
な簡単なもんやないで」と冷めてい
た。が、実現した。不可能が可能に
なった。その途標する希有な経験を
したからこそ、後にソロとして再び
歌謡界の真ん中に立つことになっ
ても「欲はなかった」のだという。

四十代、五十代のころ、曲の売れ
行きに悩んだときも「自分の好きな
ことをやろう、売れんてええんやか

ら」と割り切った。「何が好きなの
か」といえばライブだ。それなら、ラ
イブをやるためにアルバムを作りや
い。それからは、自身のプロデ
ューズで新譜を毎年欠かさず発表し
てきた。現役である証した。

原点はロックンロール。新アルバ
ム「写真」の題名でもある。「僕が
ジャズ喫茶で始めたころは、ティ
ンエージの音楽だから大人になって
歌うたらあかんやで、と言われて
た」。それを否定せず受け継いで
くれた若い世代がいたからこそ、今
も歌っていられる、この思いがある。

そのアルバムの九曲目に据えたの
は、自ら作詞した「我が窮状」。
暗喩を含んだ、キュウジョウウ(九
条)の響きに、よって立つ「基盤」
の重みをそとと語らせた。「誰か言
わないかなあ、と期待する人はい
はいる。僕がそつであるよつと。
変えてほしくない、とついでです」

四十年を超すキャリアだが「僕は
何も偉くない。選んでもらっている
だけなんです。だから今も、ド
ームがお客で埋まるよう願掛けして、
好きな酒を断っている。では、ここ
まで続けられた原動力は、「ここ
たれないぞ、という自信はありまし
たね。売れる自信はなかったけど」。
目にグッと力がこもった一瞬。照れ
笑いが、すぐにそれを隠した。

記者の一言

記者は緊張してい
た。やや舞い上がって
もいた。東京・青山の
ホテル。対面した沢田
さんは言葉を選び、と
きにはかみながら、
丁寧に語ってくれた。

楽曲について聞い
た。「思えば歌詞にし
ているわけで」。事
細かに解説しても、す
べての人には分かって
もらえない。テレビ
というマスな世界に身
を置いた人の結論だ。
でも、ちゃんとフォロ
ーしてくれた。「六十
歳になったら言っても
いいことがあると思っ
たよ」。それが窮状は
はじまり、そついで「こ
となのだらう」。

団塊世代だが、そう
呼ばれることには「僕
は気に入りませんね」
ときっぱり。「ひとか
らに言いますけど、
そつじゃない人もい
るわけで」。年を重ねた
ジュリーのかっこよ
さ、ここに垣間見た。

お気に入り

「ずっと仕事のこ
としか考えてないか
ら」。インタビュー中
に、さりりと話した
沢田さん。毎年出演
している音楽劇は「
(歌手と俳優を)舞
行ったり来たりする
のがいいですね。舞
台が終わってすぐ
歌うとすごく新鮮
で」

とはいえ、オフに
は横浜スタジアムに
足を運ぶこともある
野球好き。古くから
の阪神ファンだ。「阪
神戦は切符取れない
んですよ。シャ
イアンツ戦なら取れ
るんですが」